

平成4年度

# 唐古・鍵遺跡

第52次発掘調査概報

1993

田原本町教育委員会

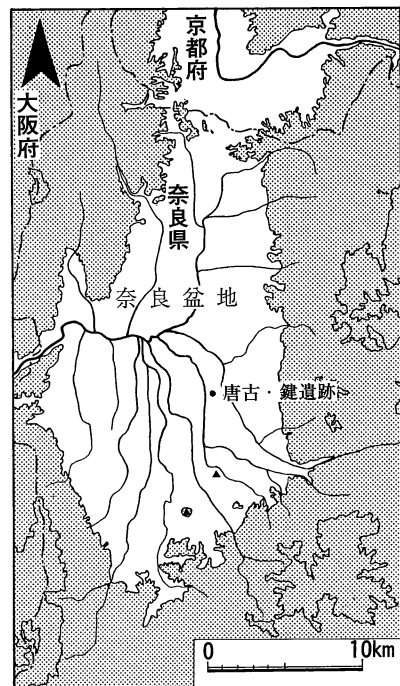
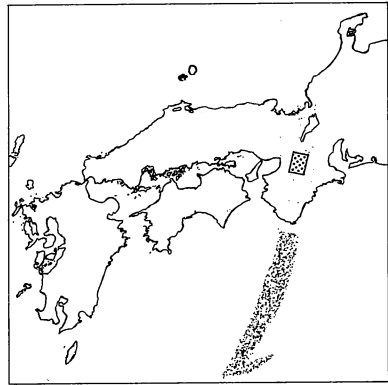


# I. はじめに

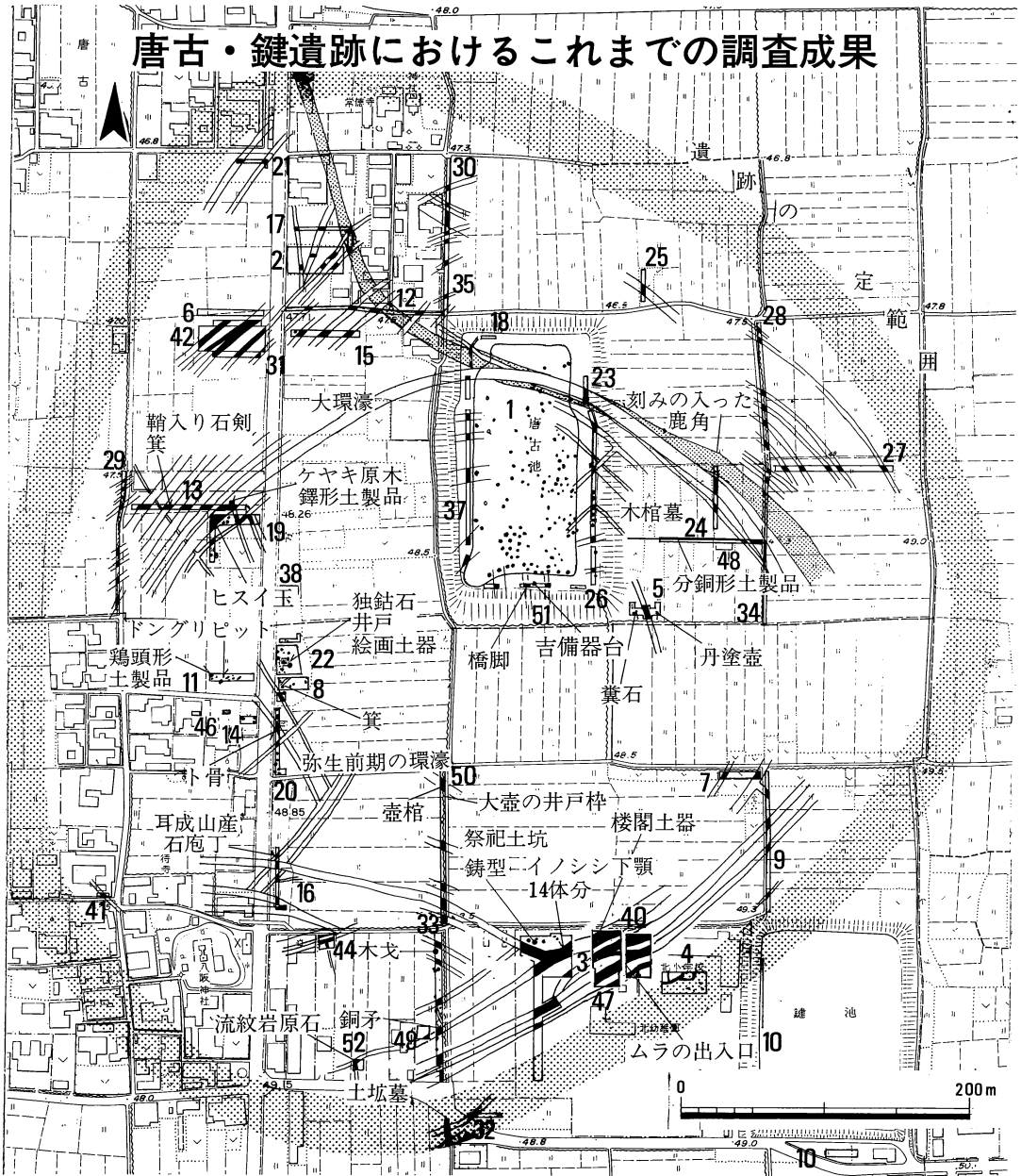
唐古・鍵遺跡は奈良盆地のほぼ中央部に位置する弥生時代の代表的な環濠集落である。標高47～49mの沖積地に立地し、現在は唐古池と国道を除く大部分が水田下に眠っている。近年、国道沿線において民間開発がおこなわれるようになってきた。また、大部分が農地であるため、農業整備に伴う水路やため池改修などの開発も毎年のようにおこなわれてきている。このような原因で、唐古・鍵遺跡の調査は毎年3～5件を数え、調査回数も現在52次に至っている。これまでの調査を総合すると、その占有面積は環濠集落のみで約30万㎡に達する。環濠集落内部では柱穴や井戸、木器貯蔵穴、区画溝、木棺墓、土器棺墓などが検出されている。また、出土遺物においては銅鐸の鋳型や細形銅矛片、鞘入り石剣、絵画土器、各種の木製品などがあり、出土する遺物は多種多様で、膨大な出土量になっている。

平成4年度におこなった唐古・鍵遺跡の発掘調査は第50次から第52次調査の3件であるが、国庫補助事業として実施したのは第52次調査である。第52次調査地は遺跡の南部（環濠帯付近）にあたり、農家住宅の新築に伴う事前調査として平成5年2月8日から同年2月26日までおこなった（第1表）。今回の調査地の周辺では、これまでに第32・33・44・49次調査がおこなわれている。本地の東方50～80mの地点では第32・33・49次調査がおこなわれ、弥生時代前期から後期にかけての環濠群や居住遺構を検出し、弥生時代前期の南地区の中心地であることが明らかになっている。また、本地の北80mでは第44次調査が実施され、弥生時代前期から後期の大溝や井戸などを検出している。このような成果から今回の調査では、環濠及び居住遺構が検出されると予想された。

発掘調査は住宅建築場所において、東西8m、南北7mの調査区を設定し、水田耕土等約0.4mの表土層をバックホウを用いて除去し、その後、人力による調査をおこなった。また、調査区の南端において、遺構の性格が不明な点があったので南側へ2×2mを拡張して遺構の性格を把握できるように努めた。その結果、後述するような成果をあげることができた。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置



第2図 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点 (S=1/5000)

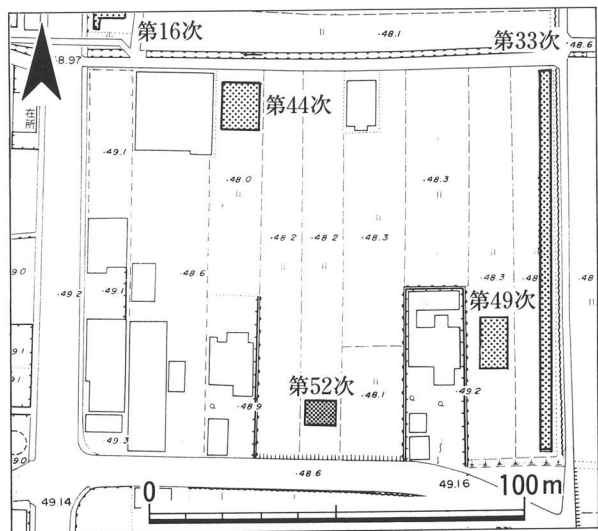
第1表 発掘調査の概要

調査回数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第52次	鍵266-4	農家住宅新築	水田	乾 アサノ	1993.2.8 ～2.26	60m <sup>2</sup>





写真1 唐古・鍵遺跡全景 (1992年11月撮影)  
(上が北)



第3図 第52次調査地付近の調査  
(S=1/2000)

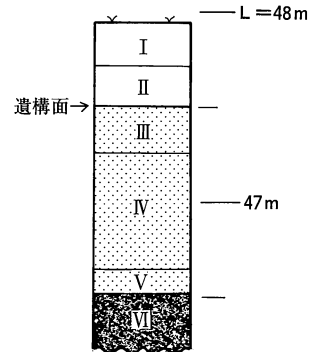
## Ⅱ. 発掘調査の成果

### 1. 堆積土層

調査地の土層の堆積状況は単純で安定した土層堆積を示している。基本的には弥生時代以降の土層堆積はない。本地の基本的な土層堆積状況は次のとおりである。

第Ⅰ層：茶灰色粘質土（水田耕土層）、第Ⅱ層：淡灰褐色粘質土（水田床土層）、第Ⅲ層：暗茶灰色微砂、第Ⅳ層：黄灰色微砂、第Ⅴ層：青灰色微砂、第Ⅵ層：黒色粘土となる。

第Ⅰ層から第Ⅱ層までは近世以降の堆積と考えられ、0.4mの厚さを測る。第Ⅲ層から下の土層は弥生時代以前に形成された土層堆積であり、土器をまったく含んでいない。したがって、第Ⅲ層の上面で、近世以降の南北の小溝群と以下に述べる弥生時代の諸遺構を同時に検出した。



第4図 基本土層図

### 2. 検出された遺構

検出された遺構には弥生時代前期と中期のものがあり、遺構の種類としては大溝と土坑、河道である。遺構密度は低い。

#### 弥生時代前期

弥生時代前期の遺構として明確なものがないが、調査区の東半において河道を検出した。この河道は粗砂層で埋没しており、河幅6m以上、深さ1mを測る。この河道については、北端のみ河底まで検出したが、遺物は、摩耗した土器小片1片のみであった。したがって、時期判定は困難であるが、この河道の北延長上にある第44次調査で弥生時代前期の河道を検出していることから、これにつながる河道として、理解できそうである。また、遺構でないが、後述する弥生時代中期の大溝（SD-102）の下層では局部的に厚さ0.2mの前期の土器を包含する暗灰黄色微砂層がみられ、大溝が掘削される以前は調査区の西半が窪地になっていた可能性がある。

#### 弥生時代中期

**土坑（SK-101）** 調査区の北端で検出したため、遺構の輪郭は把握できない。現長1.5m、深さ0.3mを測る。

**環濠（SD-101）** 環濠は北東から南西に走向するもので、調査区の西北部で検出した。溝幅約3m、深さ約1mを測る。溝の堆積は大きく3分でき、下層は粘土層、中層は細砂・粗砂層、上層は微砂層（粘質）である。環濠の南側は給排水と考えられる大溝（SD-102）に接続してい



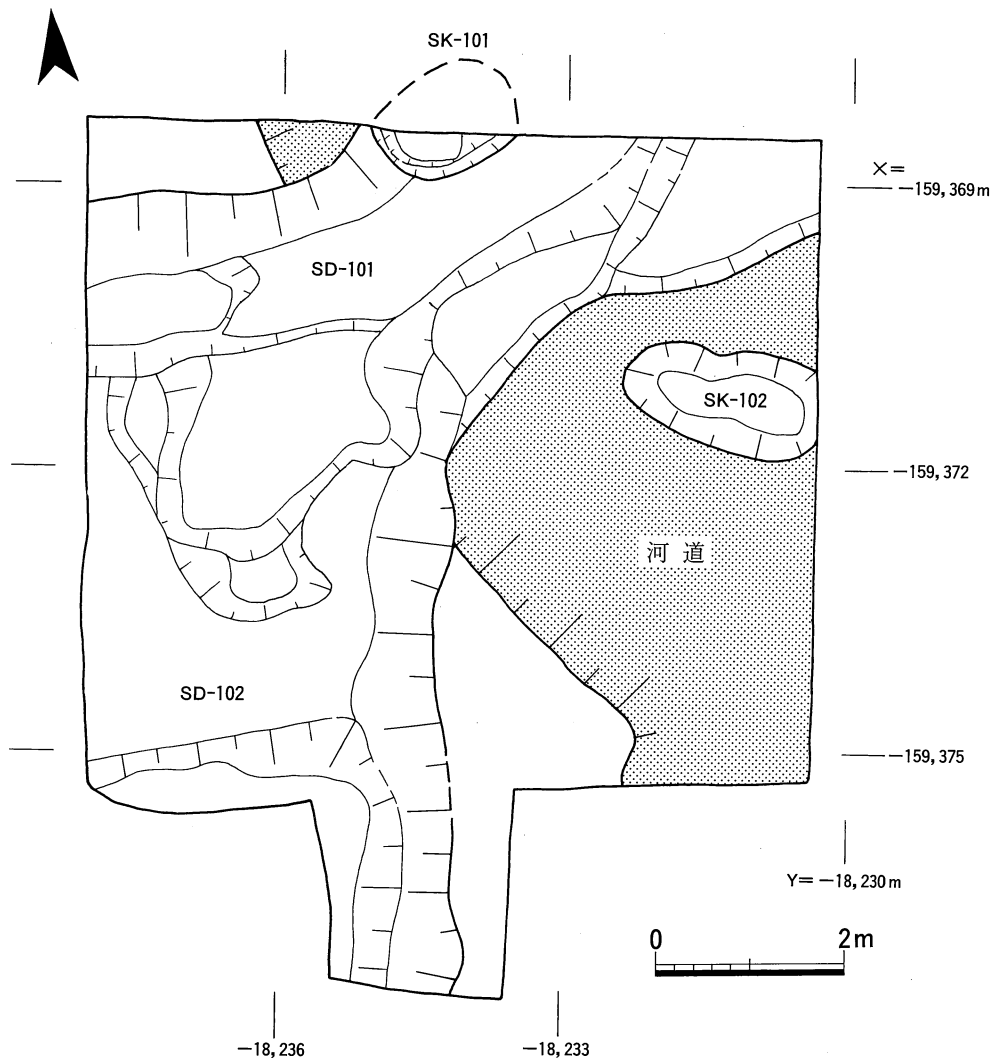
写真2 調査前



写真3 遺構検出状況



写真4 完掘状況



第5図 第52次調査遺構平面図 (S=1/80)

るが、なんら施設を用いていない。遺物には土器や石器、流紋岩原礫などがある。

**大溝 (SD-102)** 大溝は調査区の西端で検出しているため、規模は明確にできないが、溝幅約5m、深さ約1.2mを測る。ほぼ南北方向に走向するが、南側へ深くなっていくようである。元々弥生時代前期の窪地を利用して掘削された可能性がある。溝内の堆積は、下層(灰黒色粘質土)、中層(茶灰色粘質土・微砂)、上層(茶灰色土)である。中層の堆積土は環濠部分にまで覆っている。遺物は中層を中心に拳大から人頭大の円礫・角礫が40個余り出土した。この角礫のなかには流紋岩の原石や剥片が十数点含まれていた。



写真5 SK—101完掘



写真6 SK—102完掘



写真7 環濠 (SD—101) 完掘





写真8 環濠・大溝遺物出土状況（南から）



写真9 環濠・大溝遺物出土状況（西から）



写真10 大溝上層  
土器出土状況



写真11 大溝中・下層  
遺物出土状況



写真12 大溝中・下層  
遺物出土状況



### 3. 出土した遺物

出土した遺物は集落内部に比較して、その出土量や種類は多くない。土器が最も多いがほとんどが弥生時代前期と中期の土器である。土器のほか、石器・木器・獣骨・種子の出土があるが、石器以外の遺物はごく少量である。

#### 弥生土器（第6～10図・写真13～15）

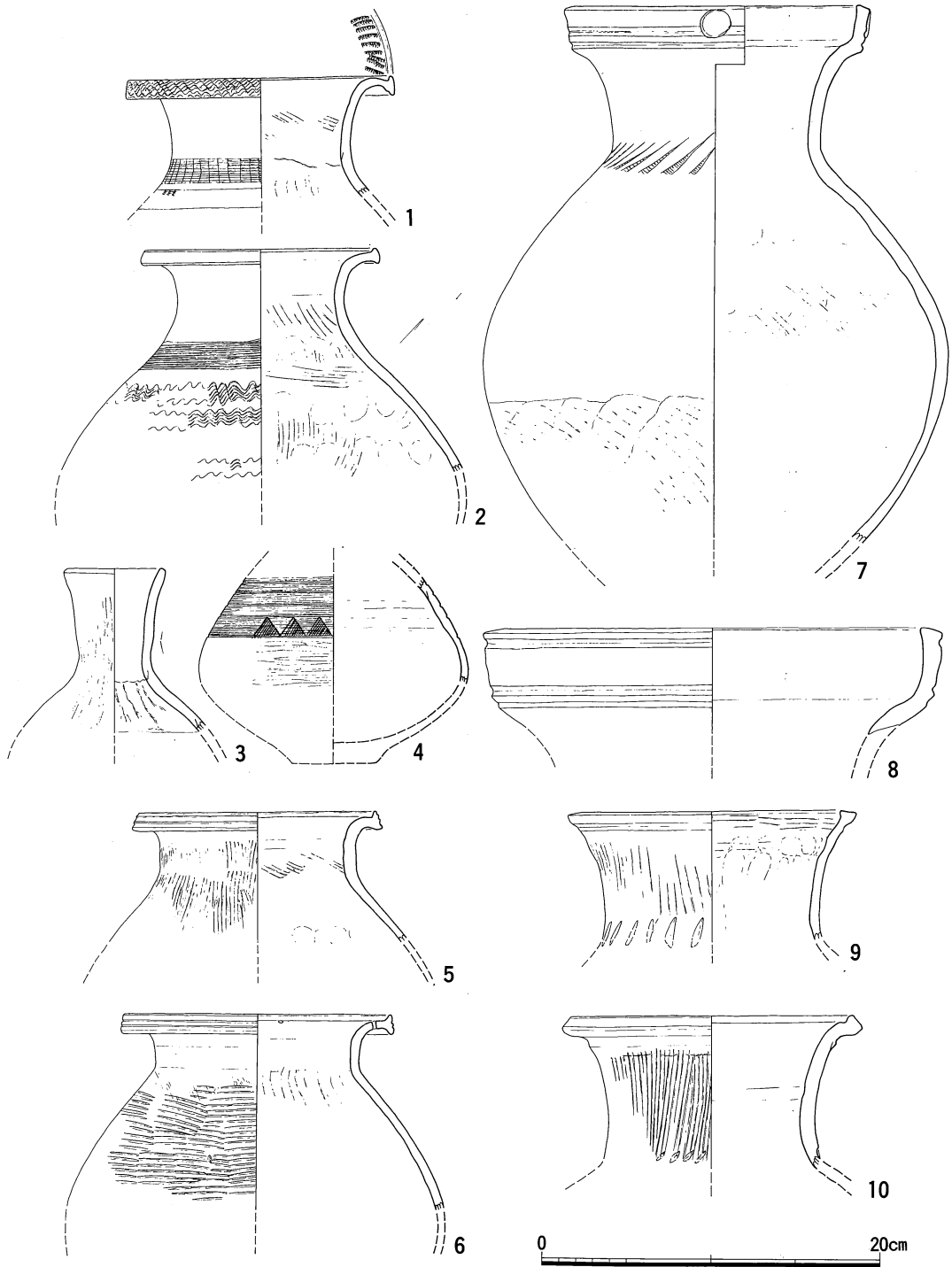
弥生土器の大半は環濠と大溝から出土している。発掘調査の状況から環濠と大溝は同時開口していたと判断された。出土土器においても2つの遺構の土器が接合することからほぼ時期を同じくして埋没したと考えられる。また、下層・中層・上層・最上層の土器が接合するものもあり、大きな時間の隔たりをなくして埋没したことも窺える。土器の大半は弥生時代中期後半（大和第Ⅳ様式）のものであるが、弥生時代前期から中期初頭（大和第Ⅰ—Ⅱ～第Ⅱ—Ⅱ様式）の土器も混在状況で出土している。

ここでは、環濠と大溝から出土した中期後半の土器を第6～8図に、この他、線刻画土器や特殊文様等を第9・10図に掲げる。

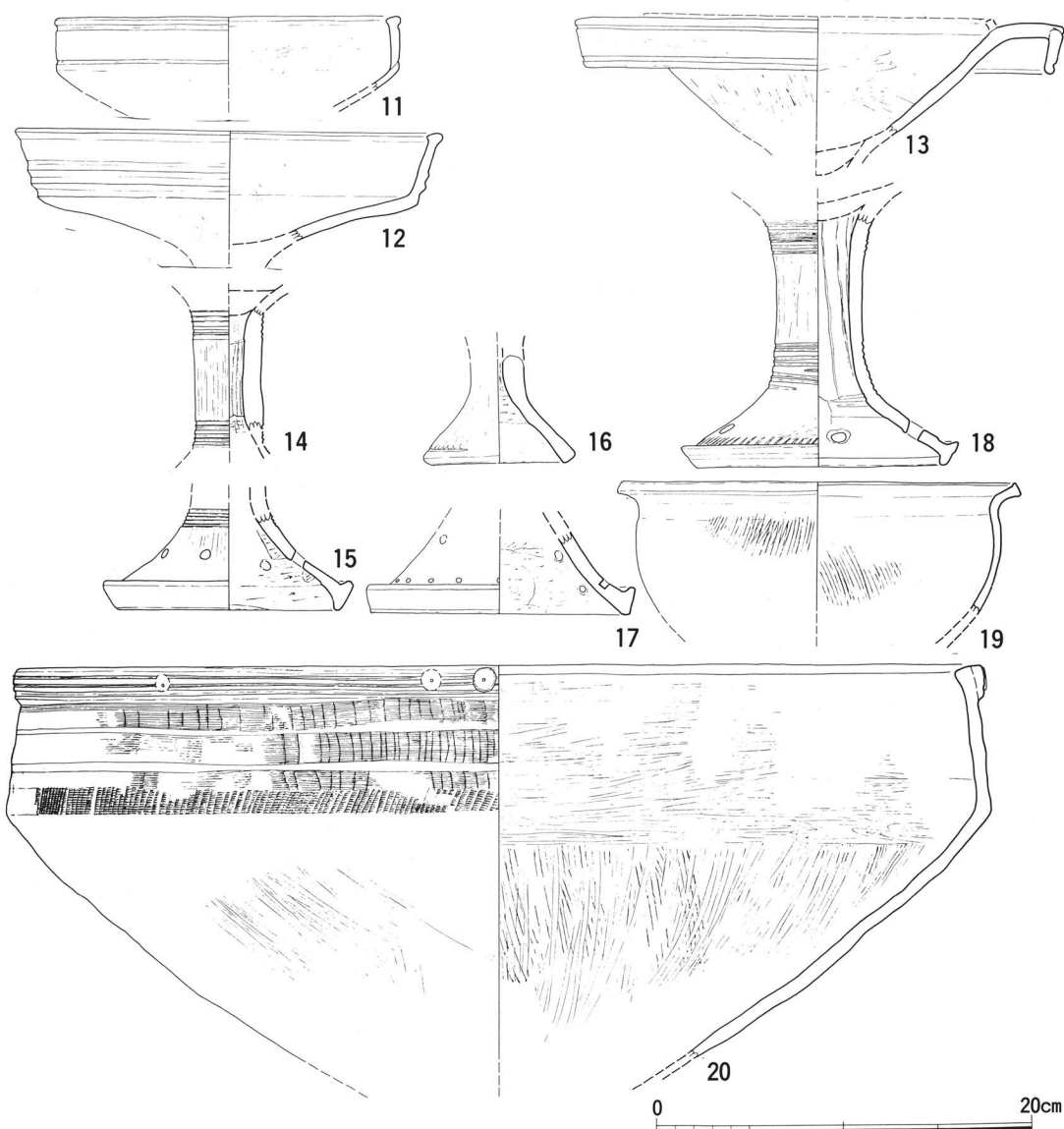
**壺** 1・2は文様のある広口壺、3・4は細頸壺、5・6は文様をもたない広口壺、7から10は短頸壺である。1は口縁端部が上方へ突出し、はね上げ口縁になる。口縁部の上面には櫛描き列点、端面には波状文、胴部には簾状文を2帯以上めぐらす。2は口縁部からゆるやかに広がる胴部を有する。胴部には幅広の櫛描きで直線文と稚拙な波状文を施す。3は無文の細頸壺である。4は細頸壺の胴部の破片である。ハケ工具の直線を描いた後、ヘラミガキによる直線と鋸歯文を施す。5・6は同じ形態の壺であるが、5はハケ調整、6はタタキ成形で仕上げている。6は外面に煤の付着がみられる。7～10は短頸壺であるが、7・8は口縁部が受け口状になるタイプ、9・10は口縁部が直立するタイプである。7は口縁部の外面に2条の凹線を施した後、円形浮文を貼り付ける。頸部と胴部の境にはハケによる列点をめぐらす。この土器は口縁部がSK—101、胴部が環濠と大溝から出土している。8は大形の短頸壺である。9・10は口縁端部の形態が異なるが、外面は粗いハケを施し、頸部下端にはヘラによる列点をめぐらす。

**高杯・鉢** 11～18は高杯、19・20は鉢である。11・12は受部を有する高杯で凹線文をめぐらす。13は垂下口縁の高杯である。杯部外面にはケズリがみられる。14～18は柱状脚部である。14・15・18の脚部の屈曲部にはヘラによる直線文が施されている。また、18の脚部裾にはヘラによる列点もみられる。これらの内面はケズリがおこなわれている。19は中形の椀形の鉢である。20は大鉢である。口縁部は外側に粘土紐を貼り付け、3条の凹線と2個一対の円形浮文を貼る。また、体部上半には3帯の簾状文と1帯の列点文が描かれる。内外面ともミガキ調整を施す。

**甕** 21～31は甕である。甕は大きさから3つに分類できる。21～25は小形、26～28は中形、29～31は大形である。21～23は口縁部のヨコナデが弱く、口縁端部の折り返しの小さいものである。21は胴部上半を左上がりのタタキ、胴部下半はケズリをおこなう。22は粗いハケ調整が施され、

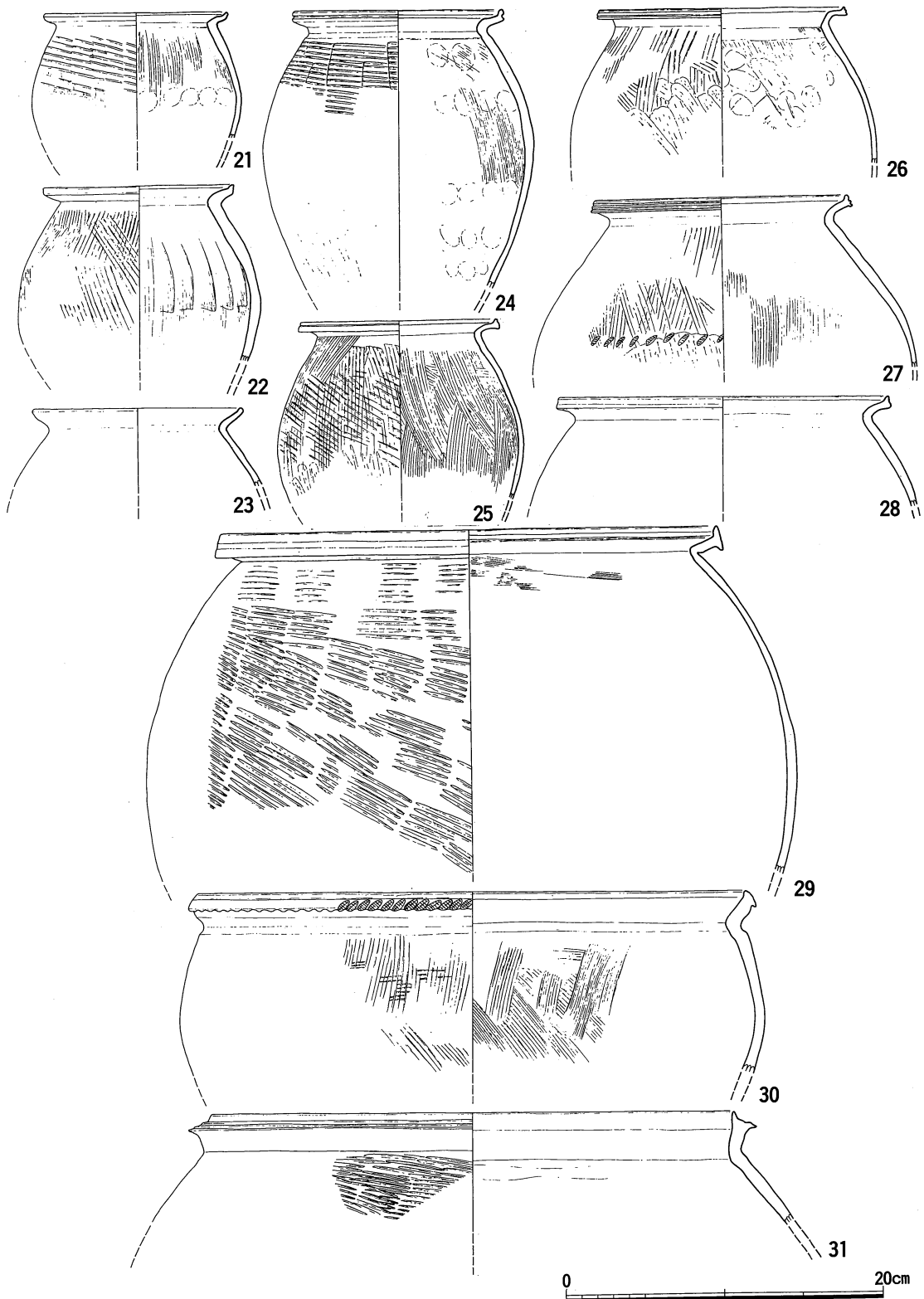


第6图 土器実測图1 (S=1/4)



第7図 土器実測図2 (S=1/4)

下半にケズリがみられる。器壁は厚い。23の口縁部は従来の甕と異なり、ゆるやかに内湾する口縁部である。器壁は薄い。24は胴部上半にタタキ成形がみられるが、タタキ原体の端部の圧痕が明瞭に残っている。25~27は胴部上半をハケ調整、下半をケズリで仕上げるものである。27の胴部中央にはハケによる列点がめぐる。28は丁寧なナデ調整でハケを消している。29は口縁部の屈曲が強く、大きく外反する。口縁端部は鋭く上方へ突出する。30・31は口縁部の屈曲が弱く、上方へのびる。30は口縁端部にハケによる列点をめぐらす。いずれもタタキ成形がみられる。



第8图 土器实测图3 (S=1/4)

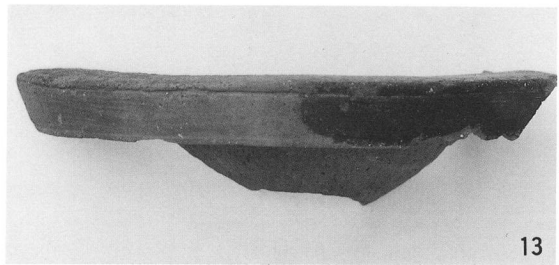
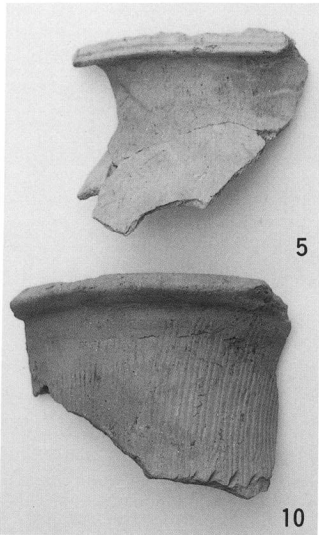
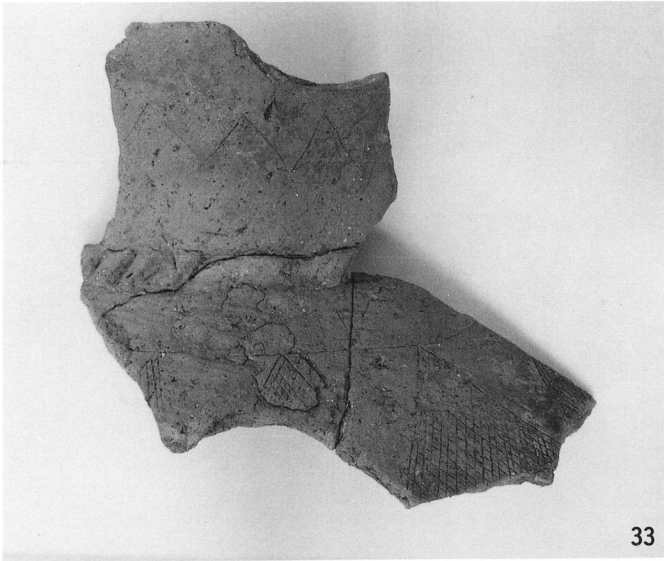
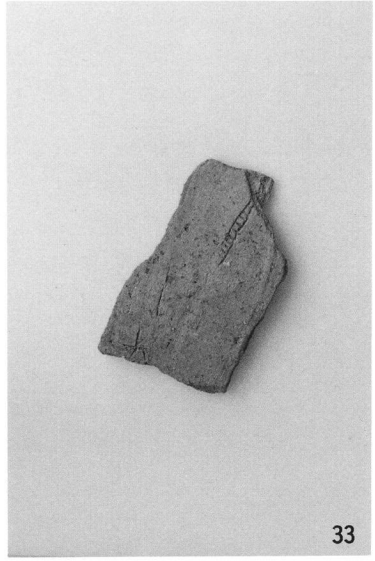


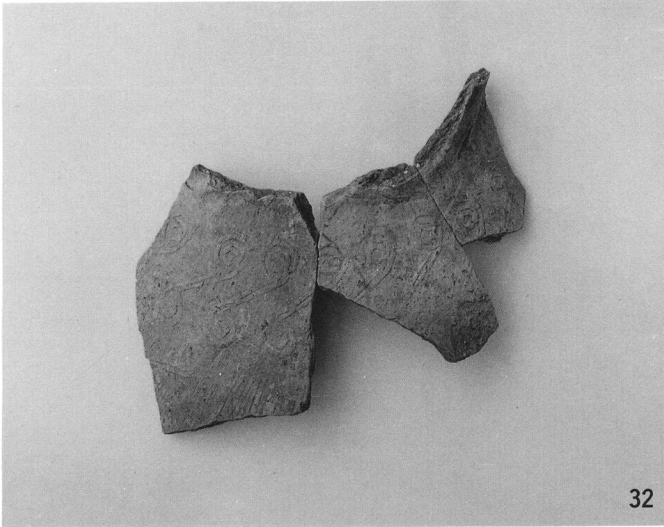
写真13 土器



33



33



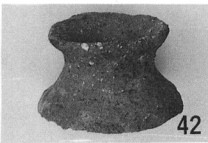
32



40



41



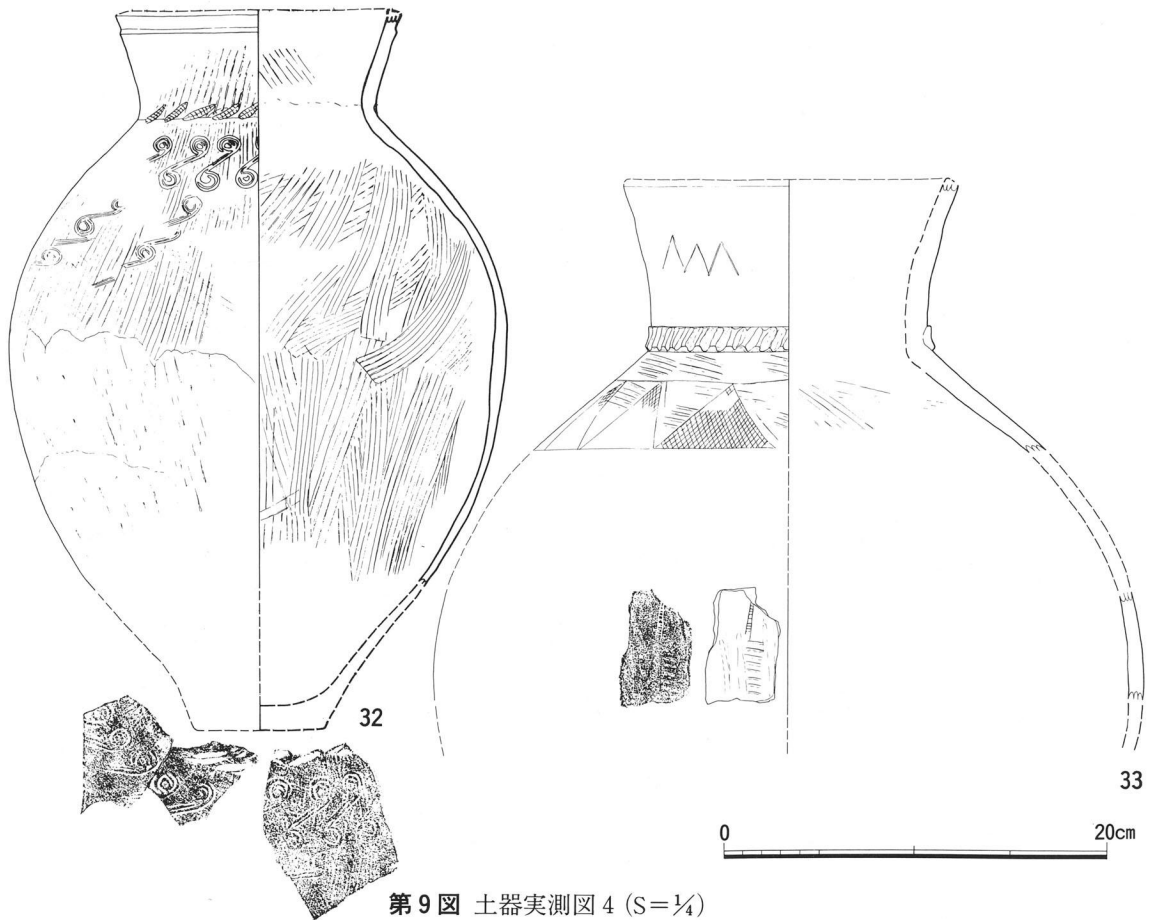
42



1

2

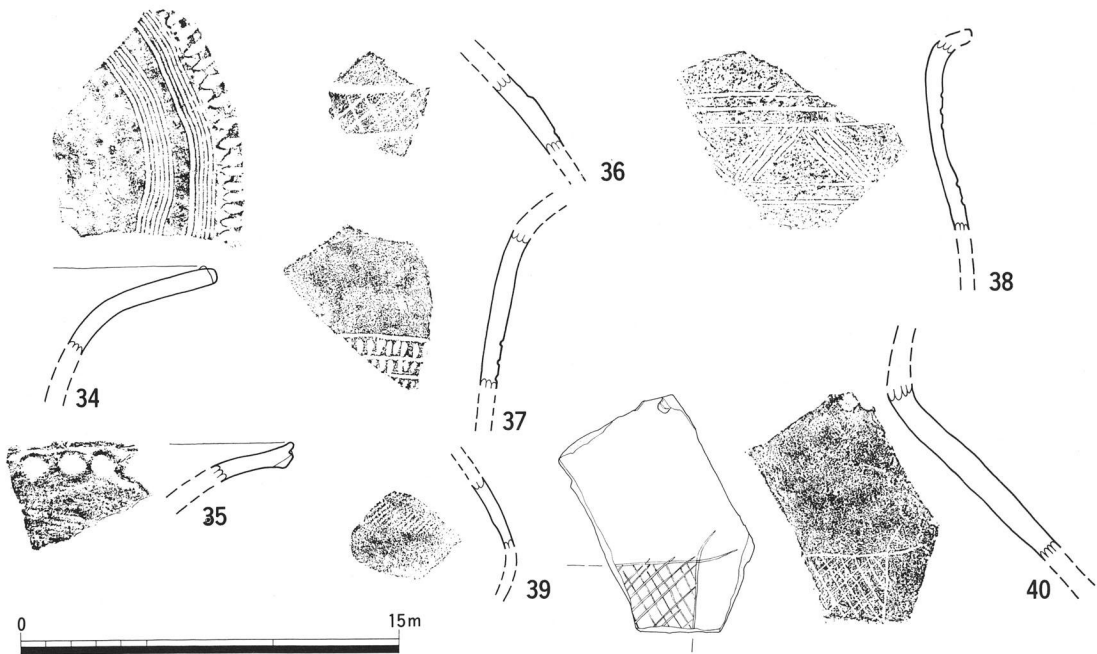
写真14 土器（線刻画・スタンプ文・ミニチュア）・木製品



第9図 土器実測図4 (S=¼)

**線刻画土器・文様** 第9図—32は逆S字状渦文のスタンプが施された短頸壺である。口縁部が直口し、上端に1条の凹線、頸部下端にはハケによる列点がめぐらされる。胴部は内外面ともハケ調整をおこなう。その後、外面の上半は粗雑なナデ、下半はケズリを施す。胴部の上端から逆S字状渦文スタンプを4～5段押捺する。押捺は左下がりにし、2段目より下は渦文が重なるよう連鎖状にしている。33は線刻画のある大形短頸壺である。短頸壺は口縁部が直口し、頸部下端に貼付け突帯を有する。外面にはタタキを残すが、針状工具で鋸歯文を頸部と胴部上半に描く。また、胴部の中央には梯子が描かれている。第10図-40も短頸壺の考えられる破片で、建物の屋根が描かれ、軒先はV字状の表現をとっている。34～39は弥生前期から中期初頭の土器である。34は壺の口縁部で、上面に櫛描直線文を描く。35は壺の口縁部で、端部を指頭で押え、波状口縁にしている。36は壺の胴部で突帯上に斜格子文を描く。37は壺の頸部でヘラ描沈線間に列点を施す。38は山形文の描かれた甕である。上に3条、下に2条のヘラ描直線文を描いた後、3・4条の斜線で山形文をつくる。39は中期の壺の破片である。縄文(L-R)が施されている。





第10図 線刻画・文様拓影 (S=1/3)

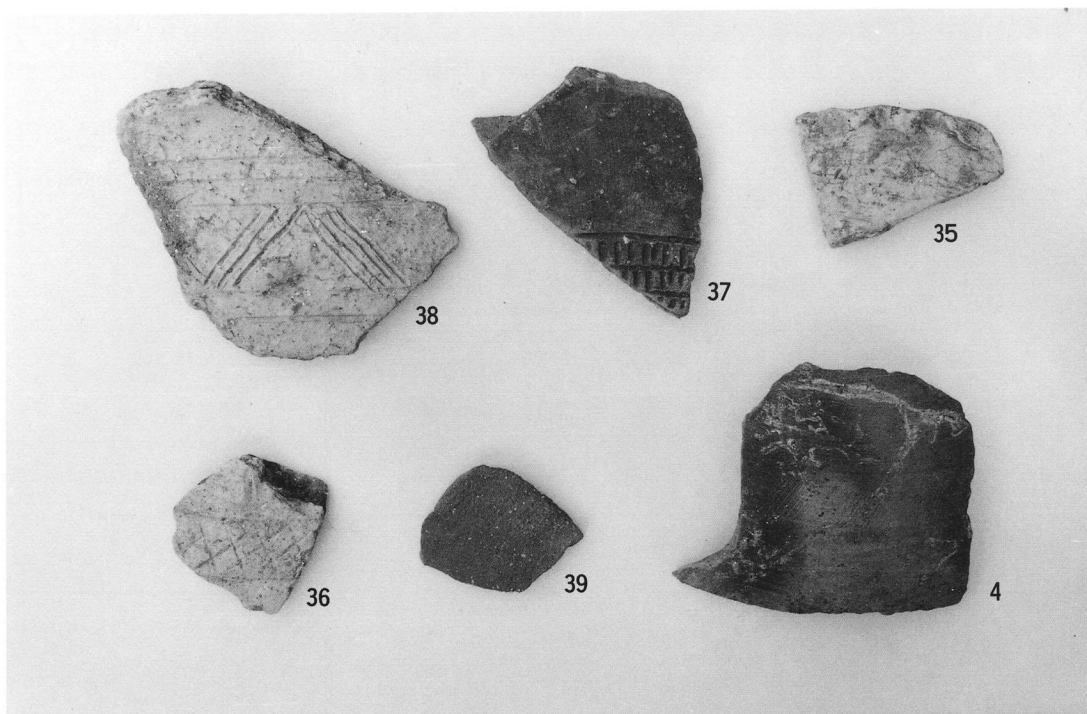


写真15 土器線刻画・文様

## 石器 (第11図・写真16～19)

石器も土器と同様、環濠と大溝から大半が出土している。しかしながら、石器の総量は居住区内に比べ、低い。出土した石器は、サヌカイトの打製石器、結晶片岩製石庖丁の磨製石器、流紋岩の剥片・原石の3つに分けることができる。

**打製石器** 写真16—1は有茎式石鏃である。長さ5.4mを計る大形品である。2～4は石剣の欠損品と考えられる。2は基部に自然面を残す。3・4は折れ面に巧打痕があり、転用しているかもしれない。5～6はスクレイパーである。いずれも折損している。

**磨製石器** 第11図・写真17は結晶片岩製の石包丁である。いずれも欠損している。写真17—1～3・5は片刃、6は両刃の石包丁である。1・2は刃こぼれが激しい。3は長方形を呈しているが、これは左側が欠損し、再加工したためであろう。左端に孔の一部が残っている。4は大形石包丁である。一側辺のみ残す。この石質はやや脆く淡い緑色に明茶色（鉄分?）がかかっている。

**流紋岩剥片・原石** 写真18は流紋岩の剥片、写真19は原石である。剥片は大きいもので、長さ20cmほどのものもあるが、2・3～10cmのものが多い。流紋岩の原石は最も大きいもので、おおよそ長さ40cm、幅と厚さ20cm、重量約12.7kgを計る。原石は8点あるが、板石状のものもある。

## 木器 (写真14—41・42)

木器は大溝から出土したが、製品はない。写真14—41は丸太状であるが、割れており、用途不明である。長さ約61cmを計る。42は断面をL字形に加工した材である。これも割れており、用途は不明である。外面は風化している。長さ約36cmを計る。

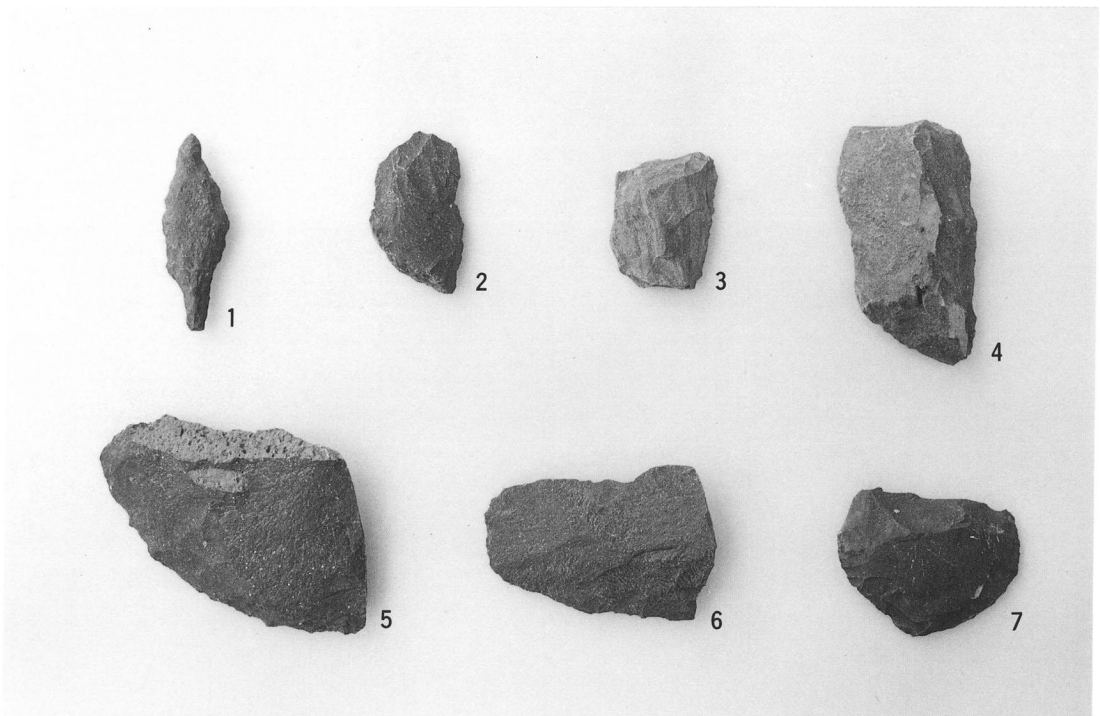


写真16 石器 (サヌカイト製品)

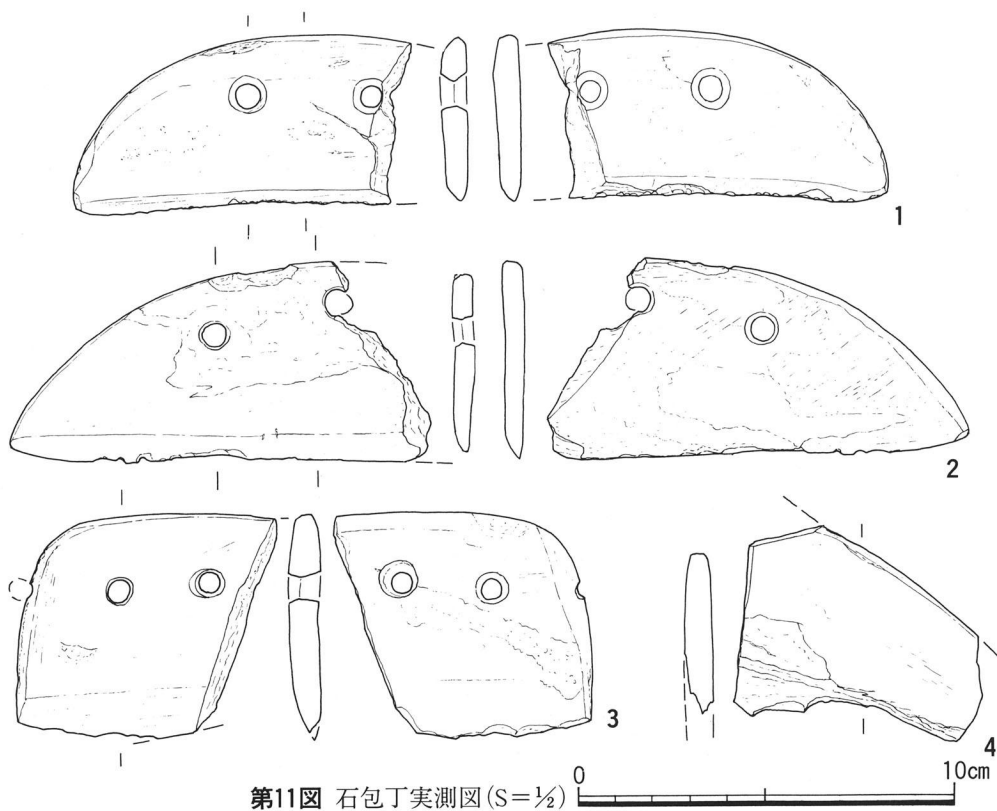


写真17 石器（結晶片岩製石庖丁）

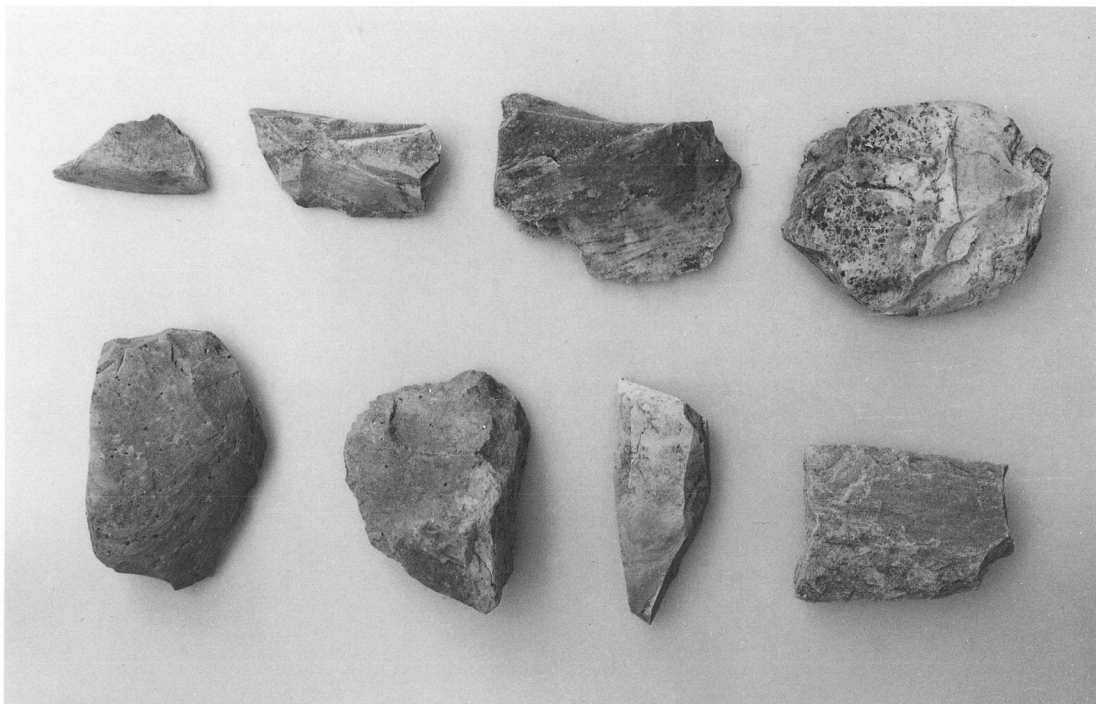


写真18 流紋岩剝片



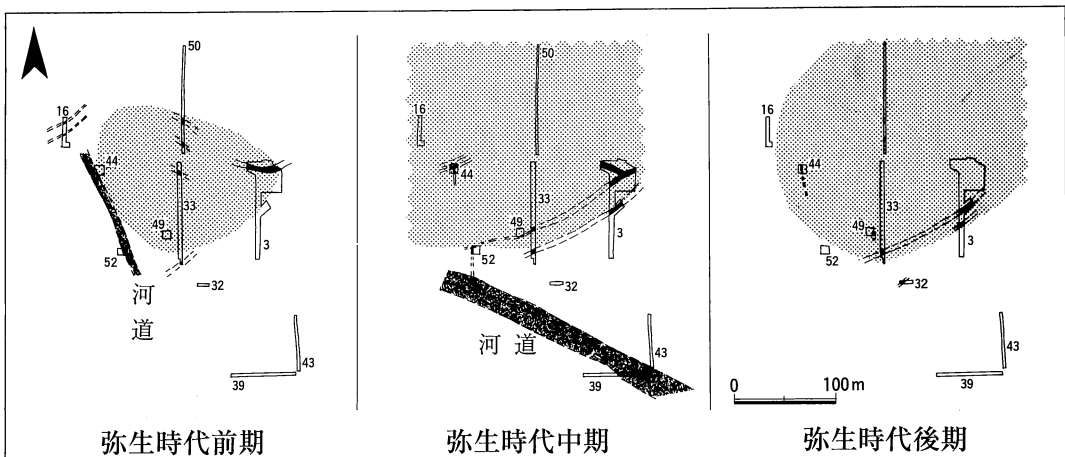
写真19 流紋岩原石

### Ⅲ. ま と め

第52次調査は、これまでの調査で最も遺跡の西南部にあたる場所である。従来からこの地区の様相はあまりわかっていなかった。このようなことから、今回の調査は遺跡の範囲とその様相を把握する上で重要な調査となった。調査における遺構・遺物については前述したとおりの成果であるので、ここでは、この周辺の弥生時代前期から後期までの時期的な変遷を考えてみたい。

**弥生時代前期** 調査では、弥生時代前期の河道を1条検出した。この河道が第44次調査で検出したものと同一の可能性が高い。この河道は北北西方向に流れた小規模な河である。河内の堆積は砂層で埋没しており、長期にわたるものでなく、短期間に流れた一過性の河と考えられる。第52次調査では、遺物はほとんど出土しなかったが、北80mの第44次調査では弥生時代前期の土器を多く出土した。このことは、第52次調査地と第44次調査地の間に居住区があり、そこにあった土器が流れたのであろう。したがって、弥生時代前期における南地区の居住区の中心が第33次調査地付近であり、西限がほぼこの河道のラインと判断していいと思われる。また、第33次調査で出土した土器と第52次調査出土のものが同一個体であったことから、この調査区間を1つの行動範囲内とすることもできよう。

出土遺物で注目すべきは流紋岩の原石である。これは中期の大溝（弥生時代中期）から出土したものであるが、唐古・鍵遺跡でのいままでの使用状況や時期からすれば、この流紋岩は弥生時代前期から中期初頭のものである可能性が高い。また、第52次調査地の北130mの第16次調査で、流紋岩製石包丁の製作工程を把握できる大量の剥片と2つの原石が出土していることを考慮すれば、このあたりに石包丁の製作工房があり、第52次調査地付近が原石の集積地になっていたことも考えることができる。集積された原石は弥生時代中期には、紀ノ川の結晶片岩製石包丁の登場により、不要となり、廃棄となったのであろう。



第12図 唐古・鍵遺跡西南部の居住域変遷図

**弥生時代中期** 中期後半の環濠と環濠に取り付く大溝を検出することができた。環濠を検出したことで、弥生時代中期のムラの範囲が判明した。しかしながら、環濠以外の居住関係の遺構が希薄であることから、居住区としての広がり locality におよんでおらず、北側に広がりそうである。環濠に取り付く大溝は、これまでの調査ではあまり明確でなかった部分である。環濠は常に水のある状態であり、環濠への給排水の役割を果たしていたのであろう。また、本地の南側は第39次調査の成果から弥生時代中期の河道が推定でき、環濠と河道が大溝によって結ばれていたと考えることができる。このように環濠から外側に走向する溝は第40次調査でも検出しており、何本もの溝が環濠に取り付き、環濠の水位を調節していたのであろう。

総遺物量の大半が弥生時代中期の土器であるが、居住区内の遺物分布からすれば少ない。また、居住区内では獣骨や種子などの食料遺物や木器が多く出土するが、ここではほとんどみられない。このようなことから、弥生時代中期の居住空間が本地に及んでいないことがわかる。また、弥生時代中期の前半の遺物が少ないことから、この時期の様相はあまりよくわからない。

**弥生時代後期** 弥生時代後期の遺構は検出しておらず、遺物も土器が数点のみであることから、この時期の実態もつかめない。本地の東50mの第33次調査で検出した大量の土器が出土している後期の環濠の方向からすれば、本地は十分に居住区内にあたる。このようなことからすれば、第52次調査地の様相は理解しがたく、今後この周辺の調査を重ねていく必要性が生じた。

以上、簡単であるが、第52次調査の成果と課題を時期的変遷を通してまとめた。唐古・鍵遺跡は約30万㎡を占有する大集落であるが、その中では各地区ごとの特徴があるようで小規模な調査ながら少しずつ復元が可能になってきた。今後、調査を重ね、面的な把握も必要となってくるであろう。

田原本町埋蔵文化財調査概要13

—平成4年度唐古・鍵遺跡  
第52次発掘調査概報—

平成5年3月31日

発行 田原本町教育委員会  
印刷 関西美術印刷株式会社